

2.3 フィールドワークによるデータ収集

高橋優佳

2.3.1 フィールドワークとは

- ・ 「調べようとする出来事が起きているその「現場」(＝フィールド)に身を置いて調査を行う時の作業(＝ワーク)一般」(佐藤, 1992)
- ・ 代表例：参与観察(参加観察)とよばれる手法を使った調査・・・文化人類学
- ・ まるごとそれを体験できるのが魅力

2.3.2 フィールドワークの方法

(1) 参加観察法(participant observation method)

- ・ 定義：「調査者(観察者)自身が、調査(観察)対象となっている集団の生活に参加し、その一員としての役割を演じながら、そこに生起する事象を多角的に、長期にわたり観察する方法」(三隅・阿部, 1974)
- ・ 交流的観察：観察者が対象者と何らかのやり取りをしながら観察する
 - アクションリサーチの方法をとることも可能(第6章参照)
- ・ 非交流的観察：対象者やその現象から一步距離を置いて自然観察する
- ・ 特徴：集団に参加しながらも、明らかにした(ママ)事柄によって対象者と観察者の位置を調整しながら観察できる

(2) マルチメソッド

- ・ フィールドワークでは、様々な研究法を組み合わせる多角的な対象理解を試みる
- ・ 漁業者が行う網代の定位活動の研究(澤田, 1995b)
初期の船上観察 聞き取り調査 船上での微視的観察 フォローアップの聞き取り

2.3.3 フィールドワークの過程

(1) 事前準備

調査対象に関連した資料収集

- ・ 何も知らずに参入してくる研究者は、受け入れ側に敬遠される
- ・ フィールドで得る資料に新鮮さを失う、バイアスが働き資料収集が偏るという危険性
フィールドに出たら自分でそれら確かめる

調査によって得られた資料を理解し整理する枠組みを作るための文献研究

- ・ 資料の理解の枠組みや問題発見の方法をあらかじめ学んでおくことによって、現在得られたデータとその場で理解し、即座に次の観察の視点や発問につなげられる

(2) フィールド・エントリー

- ・ よそ者が対象者に受け入れられ、一定の役割やポジションを得て落ち着くまでの過程
- ・ 調査者という立場を外見から明確にしてあらたな自分の役割をつくる

- ◇ 特定の役割や人間関係に縛られずに調査できる可能性が開ける
- ◇ フィールド内で役割をもって生活している者ではとりえない対人関係の構築可能

(3) 全体観察

- ・ フィールド・エントリーと平行して、フィールドの全体像を掴むことが重要
- ・ 環境になじむ前に、観察したものを羅列的でもよいから全て記録する

(4) ラポール形成とインフォーマントからの説明

- ・ インフォーマント(informant:情報提供者):研究者の質問に答えてくれる人
- ・ インフォーマントから信憑性のある情報を提供してもらうために、親しみ深い信頼関係(ラポール)を形成することが重要

(5) 記録 - フィールドノート(fieldnotes)

- ・ 「調査地で見聞きしたことについてのメモや記録」(佐藤, 1992)
 - 現場メモ・清書版フィールドノート・日記等の記述資料
- ・ 他にビデオカメラやテープレコーダーの記録媒体の利用は豊富な資料採集につながる
- ・ 全体観察やインフォーマントからの聞き取りの結果を整理
 - 研究対象の理解を深め、仮説を立て、その後に行なう調査を焦点化する重要な機会

(6) 焦点化した観察・面接

- ・ 本来の研究目的に照らしながら明らかにしたい事柄や現象にターゲットを絞る
- ・ 「焦点化した調査の結果をインフォーマントに話す 新たな説明や視点の付与 さらなる調査」という対象者との相互交流による研究の進行
- ・ それと平行して、その事柄や現象が生じる状況や文脈を理解し全体的な状況や流れの中でその結果を位置づけることが必要

2.4 質的調査の特質とプロセス

2.4.1 質的研究の特徴

(1) 質的データとは？

- ・ 量的データ:数字、数量で表現されたもの
- ・ 質的データ:ことばの形式によって表現されたもの(Miles & Huberman, 1984)
 - 図や映像、音声など事物や出来事の様態を写したり記したりしたもの全般

(2) 「質」の問いと「量」の問い

- ・ 数値データ
 - 数学的変換や統計処理を行なうことが可能

- 仮説検証の手段としては効力が高い
- ・ 質的データ
 - 対象となっている現象やそれ自体の理解を指向する問い
 - ◇ 「何が起きているのか」「それはどのように起こるのか？」
 - 出来事を言語的・概念的には把握する「記述」によって構成されるデータ
- (3) 質的に分析するとはどういうことか？
 - ・ 量的な分析：測定された変数の間の相互関係を明らかにするための諸手続きからなる
 - ・ 質的な分析：質的なデータの解釈・分類・類型化・概念化などの作業から構成されるデータから取り出された概念を関連付けたひとまとまりのアイデア 仮説の生成まで含む
- (4) 質的なアプローチの特徴
Taylor & Bogdan(1984)「経験的な世界へのアプローチのしかたのひとつ」
 - 機能的である
 - 対象となる事態と人々を全体的に見ていく
 - 研究者自身が対象者に与える影響に敏感である
 - 対象者の視点から相手を理解しようと努める
 - 研究者の信念、視点、事前の前提をいったん留保する
- (5) なぜ質的な研究をするのか？
 - ・ 既成の理論や概念の枠組みを越えるような、フィールドに根づいたローカルな理論を自前で作り出す
 - ・ 人間の関わる「現場」＝「複雑な要因が連関する全体的・統合的場」(山田, 1986)を、全体性を壊さないように解明するのに効果的なアプローチ

2.4.2 質的調査の研究計画

- (1) 質的調査におけるデータ収集と分析
 - ・ 出来事の客観的な概要としての第一段階の記録と、観察者によって印象深く、重要と思われた事柄を区別して記録することが推奨される(鯨岡, 1998)
 - ・ 記述された内容を分析の単位に分ける
 - ・ 観察記録：「エピソード」(鯨岡, 1998)
 - ・ 発語記録：「プロトコル」(海保・原田, 1993)あるいは「会話」(好井・山田・西坂, 1999)
- (2) 質的調査のプロセス
 - ・ 初期段階：テーマ、問題設定、対象の選定を方向付ける予備的なアイデアがある

- ・ 第一波のデータ収集 データの読み取り過程におけるキーワードやテーマ、疑問点のコーディングの作業+データの分析を通じてリサーチ・クエスチョンの明確化
- ・ 第二波のデータ収集 より焦点化され体系付けられたエンコーディング 概念の整理、カテゴリー化
- ・ 分析の最終段階：多くのデータ・セットを明確な理論的な文章や概念の枠組みによって統合することのできる、少数の中核的なテーマやカテゴリーが生み出される
- ・ 当初の開かれた(open)問題理解から、より焦点化された(focused)され、統合された概念的な理解への移行が達成される

(3) 質的調査におけるサンプリング

- ・ 理論的サンプリング(Glaser & Strauss)
- ・ ケース選択の基準：理論的な洞察を得る上でどのような付加的な情報が与えられるか（理論的な関連性）
- ・ ケース間の相互比較などの質的な分析によって浮上しつつある特定の概念カテゴリーの明確化のために、特性の一部異なるケースが調べられる
- ・ 理論的なカテゴリーを基軸にしたデータ収集によって、新たな知見が得られなくなった段階(理論的飽和)で、そのカテゴリーに関する更なるデータ収集は打ち切られる

2.4.3 質的な分析の実際 - 記述から仮説形成へ

(1) 記述すること

相互主観の有様そのものを記述することによって、厳密さが達成される(南, 1991)

対象・現場とのかかわりを通して見えてくるリアリティを「いきいきとした形で記述」し、データの「事象への密着性・忠実性」を高める(鯨岡, 1998)

行為・出来事のおかれた文脈や全体状況を含めた厚い記述を行うこと(Geertz, 1973)

研究者自身にも十分には自覚されていない問題関心などの「暗黙の理論」の働きを内省し、記述する「メタ観察」を行うこと(鯨岡, 1998)

(2) 概念・仮説を生み出すこと

- ・ 観察事象の「分類」や、面接経過・発達過程などの「段階」評定、あるいは行動や対象者の「タイプ分け」などの作業は、すべて概念化の過程を含んでいる
- ・ 結果を集約する時に用いられる図やダイアグラムなども、個々の要素となる概念とそれらの間の関係を表現したものであり、概念化、仮説生成を含んだ質的分析によるもの

(a) データ対話型理論(grounded theory)

- (1) Glaser & Strauss(1967)は理論検証ではなくオリジナルな理論発見のための方法を提案

(2) データ対話型理論：データとの絶えざる相互作用（対話）や関連する資料、比較データとの対照によって生み出された概念カテゴリーとそれを含む説明図式

各々のカテゴリーに適用可能な出来事を比較する段階

複数のカテゴリーとそれらの諸特性を統合する段階

理論の及ぶ範囲を限定図ける段階

理論を書く段階

(b) KJ法

- ・ 川喜多(1967, 1986)が人類学、地理学などの野外科学で得られた定型的データをまとめる方法として考案した
- ・ データの最小単位を決定 ラベルに記す グループ化 グループに表題を付ける(表札作り) グループ間の関係が明らかになるような空間配置、図解化 図解を元にした叙述化
- ・ 理論的と言うよりは、より記述的な性格を持つ

(c) 分析的帰納法(analytic induction)

- ・ 質的分析の枠組みにおいて仮説の検証を行う方法
説明されるべき現象について大まかな定義づけをする
データや他の研究や自分の洞察、直感から、その現象を説明する仮説を作ってみる
ひとつの事例を詳しく調べて、仮説と事例が適合するかどうか調べてみる
仮説が事例をうまく説明しない場合には、仮説を立て直すか、現象を捉えなおす
仮説を支持しない反証事例を積極的に探し出す
反証事例に出合ったときには、仮説を修正するか、現象を再定義する
広範な事例への適用を調べることによって仮説の適切さが確認されるまで上記の過程を繰り返す

(3) コラボレーション

- ・ 現場における状況の把握・理解が主観的に偏らないために、当該の事態に関与する複数の人々や専門的な訓練を積んだエキスパートによる吟味や討議の繰り返しが必要
- ・ 研究の遂行やデータの整理、分析、まとめなどで、量的方法のように手順がはっきりしていないぶん、個人的に悩み進行が留まる可能性が大きい
- ・ この点からも、他の人からの心理的支援や指導者や上級者からの助言、スーパーバイズなどの様々な形での共同作業(コラボレーション)が必要

【参考文献】 武藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ編 2004 ワードマップ 質的心理学 創造的に活用するコツ 新曜社